日本国民参加型ゲーム

two

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日本国民参加型ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ０９８３Ｚ

【作者名】
ｔｗｏ

【あらすじ】
平和な日本で突然始まった殺人ゲーム！！
ゲームクリアの条件は・・・〇〇〇
何人生き残れるのか？
それともゲームオーバーとなってしまうのか・・・

1

４月１日　カズヤ宅

１０：００

けたたましいアラーム音が家中に鳴り響く。

こんな早い時間でだるいが早く起きて準備をしなければ。

今日は絶対に遅れることはできない。

大学は春休み中なので、いつもは昼過ぎまで寝ている。

そんなおれだが、今日は早起きだ。

ユイとのデートの約束があるからだ！

…まあ、まだ付き合っちゃいないが…今後付き合えればいいな…と。

おれはカズヤ。

大学３年生になったばかりの２０歳。

趣味は野球。

野球サークルに所属。

バイトして遊んでの、典型的な大学生活を送っている。

今日のデート？のお相手はユイ。

大学2年生。
サークルの後輩。

綺麗な黒髪が印象的だが、おっちょこちょいで守ってやりたくなるような可愛い子だ。

…12時に渋谷かぁ、がんばるぞ！

2

４月１日　渋谷ハチ公前

１２：０３

やばい、まさかの遅刻…ぎりぎり間に合うと思ったが微妙に間に合わない…

せっかく早く起きたのに何やってんだおれは…

まだ電車の時間まで余裕があると思ってコンビニに立ち寄ったのがいけなかった…

まだ読んでない週刊誌が目につき、ついつい立ち読みし始めたら、電車に乗り遅れてしまった…

前の彼女と別れた原因がこれだ…

…全然おれ成長してないよ…

「ごめん、ごめん。ちょっとバス遅れてて、一本電車乗り遅れたちゃったよ」

…しょうもない嘘をつくところも全く直らないか…

「だいじょぶですよ。今日映画ですよね？私、久しぶりの映画です

ごい楽しみにしてたんですよ」

屈託のない笑顔がおれの心拍数を押し上げる。

…がんばるぞ！

3

４月１日　渋谷某スポーツバー

１９：１０

映画を見て、しばらくぶらぶらした後、おれはユイとスポーツバーへ向かった。

おれとユイの共通点は野球好きということ。

プロ野球が開幕し、一緒に野球を見れると思い、ここを選んだ。

「あのシーンよかったよね。思わず涙腺ゆるんだよね」

「そうですね！予告見た時からどうなるか楽しみだったんですよ。まさかの展開で最後はすごい感動的でしたよ」

今日見た映画は、ユイが前から見たいと言っていた恋愛物だった。

正直、おれはアクションのほうが好きだ。

4

ユイを落とすためにおれは好みでもない映画を見て、柄にもないことをしゃべっている。

（さて、これからどうするか…サプライズを準備しているがどのタイミングかが大事だぞ）

ガガッ、ガガガー、ガガー

急に店内の野球中継をしていた巨大スクリーンの画像が乱れた。

そして、途切れた。

ザーーーー

ザーーーー

画面は砂嵐になってしまった。

カタ、カタカタ、カタカタ、カタタタタタタタタ…

砂嵐の上に何か赤い文字が浮かび上がる。

『日本国民参加型ゲーム』

5

「日本国民参加型ゲーム？なんだこれ？」

店内の客はみんなおれと同じリアクションだ。

店のなんかのイベントか？とも思ったが、従業員の一人はリモコンのボタンをあちこち押しており、

もう一人の従業員は配線の確認をしているのを見ると店のイベントでもないことがわかった。

「おいっ、ここにも同じの出てるぞ！」

客の一人が自分の携帯を見せながら叫んだ。

おれも急いでジーンズの左ポケットから携帯を取り出す。

よほど慌てていたのか、携帯がうまく手に収まらず、携帯を落としてしまった。

床に落ちた携帯。

その画面にも…やはり…

『日本国民参加ゲーム』

砂嵐を背景に赤い字。

ユイの携帯にも同じものが…

6

「キャー!、何これ?なんなのこれ?気持ちわるい…」

見れば見るほど薄気味悪い映像だ。

砂嵐をバックによく日本のホラー映画で使われるような字体。

赤い文字からは少し血が流れているかのように見える。

その文字、言葉が砂嵐の中、震えるように小刻みに動く…

微かに消えてはまた網膜に焼き付けんとばかりに濃く浮かび上がる…

そこへ少し前に会計を済ませた常連客の一人が、ドアを叩き破る勢いで戻ってきた。

「外が大変なことになってるぞ!」

このバーは地下にあるので周りの状況はよくわからなかった。

おれは席を立ち上がり地上めがけて階段を駆け上がった。

7

地上に出たおれを待っていたのは、

『日本国民参加型ゲーム』
『日本国民参加型ゲーム』
『日本国民参加型ゲーム』
『日本国民参加型ゲーム』
……
……
……

正面のビルの巨大スクリーン、

店頭に面したハイビジョンテレビ、

道行く人々の携帯、カーナビ…

恐ろしいあの映像が辺り一面を覆い、ネオンが輝く街を不気味な雰囲気に変えている。

ジー、ジジッ、ジジッ…

雑音と共に『日本国民参加型ゲーム』の字が消えて行く…

カタ、カタカタ、カタカタ、カタ

代わりに出てきた文字は、

『一億三千万分の一が犯人』

それと…画面の右上には小さく…

『１３０，０００，０００／１３０，０００，０００』

…と…

8

ただ…、これは…、ゲーム…、です…

僕も…、何も…、しないで…、殺されるのを…、待つわけでは…、ありません…

僕は…、あなたたち…、日本国民…、全員を…、殺します…

あなたたちが…、僕を…、殺すのが…、早いか…、僕が…、日本国民を…、全滅…、させるのが…、早いか…

ちなみに…、現状を…、見ても…、わかるように…、僕は…、すでに…、日本の…、全ての…、電波を…、支配…、しています…

衛星も…、ジャック…、しました…

画面の…、右上を…、見て…、下さい…

今…、

『一億…、三千万…、分の…、一億…、三千万…』

に…、なって…、います…

僕が…、一人…、殺して…、いく度に…、分子が…、一ずつ…、減って…、いきます…

『一億…、三千万…、分の…、一…』

に…、なるまでに…、僕を…、殺すことが…、日本国民の…、皆さんの…、ゲームクリアの…、条件…、です…

逆に…、それまでに…、僕を…、殺せなければ…、ゲームオーバー…、です…

9

僕も…、日本国民…、です…

最後の…、『一』…、は…、僕が…、生きている…、ことを…、表します…

生死の…、カウントは…、衛星に…、植え付けた…、生存者…、管理…、システムにて…、行います…

僕が…、死ねば…、この…、システムは…、停止…、します…

手始めに…、皆さんが…、油断…、している…、うちに…、稼がせて…、もらいます…

映画が…、始まって…、5分以内で…、死んでしまう…、最も…、ザコキャラ…、さんたちは…、あなたたち…、ですよ…

…では…」

ドォゴゴーーーッン

ドグォゴォーン
ンゴゴーーッン

「キャー、キャー」

渋谷のあちこちで爆発が起き、爆発音と悲鳴が入り乱れる。

10

おれの目の前でも爆発が起きる。

閃光に目がくらむ。

手が触れるとヌメヌメとするこの感触、何かの生々しい塊、

目が開かなくとも自分の肌を通して伝わる現実…

…逃げる…逃げる？

…どこに？…どうやって？

爆発は至る所で続いている。

…とにかく落ち着け、落ち着け、現状を把握しないと…

なんでここにいるのか？…

何でここまで来たのか？…

誰とここに来たのか？…

…落ち着け、落ち着け…

ギュッと誰かがおれの手を握った。

「助けて！！」

11

おれは我に返った。

「ユイ！」

そうだ、おれはユイと渋谷に来ていたんだ。

今、おれのやることはユイを連れてこの地獄から逃げることだ。

「ユイ、逃げるぞ！とにかく走るんだ。あと絶対におれの手を離すな！」

爆発は収まる気配はない。

遠くの方からは火柱があがり、辺りは黒い煙が立ち込めている。

人間は将棋倒しになり、人が人の上を逃げている。

足元は血の海となり、人間だったものが辺り一面、折り重なるように散らばっている。

「ユイ、目を開けるなよ！」

おれはユイを守る！その一心だけで、無我夢中で逃げた…

12

４月１日　渋谷隣接郊外

２１：３５

どれだけ走り続けたか…

渋谷からはだいぶ離れたようだ。

周りには同じように逃げて来た人達が疲れ果てて座り込んでいる。

ユイを見ると、ユイもこれ以上走るのは限界のように見えた。

「ここまで来ればだいじょぶだろうからちょっと休もうか」

ユイは黙って頷いた。

渋谷の方角を見ると夜の空が赤くぼやけて見える。

もう爆発音は聴こえない。

代わりに救急車のサイレンの音が微妙に聞こえてくる。

「オェッ」

少し前まで、あの悪夢のような場所いたと思うと吐き気がしてきた。

ユイを見ると、ずっと黙ったまま、しゃがみ込み下を向いたままだ。

13

あれほどの惨状…

人間はあんなにも簡単にバラバラになってしまうのか…

人間からはあんなに多くの血が流れるのか…

人間の悲鳴とうめき声が頭の中で繰り返し繰り返し再生される。

きっとユイもそんな状況なのだろう。

こんな中、意外におれは平常心を保てた。

目の前で起きたことを思い出すと気持ち悪くなるが、自然と頭は冷静だった。

この方向に逃げてきたのもただやみくもに逃げてきたのではなく、

暗い方、静かな方を選びながら走ってきた。

携帯を開くと好きなグラビアアイドルが水着姿で微笑んでいる。

画面は通常に戻っていた。

ただ画面の右上には、

『１２９，２６１，５５０／１３０，０００，０００』

…１２９，２６１，５４９…１２９，２６１，５４８…１２９，２６１，５４７…

これだけはいつものおれの携帯とは違った…

14

『ウッド・ベル』

そいつの話が本当なら…これだけのことがあったのだから、本当なのか？

この画面の右上の数字が表しているものは、あの惨劇で死んだ人の数を表しているのだろうか？

すでに８０万人…？

「ほら、渋谷も大変なことになってるみたいだよ」

「あら、ほんと大変ねぇ。この辺りにいる人達は渋谷から逃げてきたのかしら」

近所の人がベランダから渋谷方面を見ながら話をしている。

渋谷があんなことになっているのに、日本人は自分のことでないと完全に他人事だ。

ただ、“渋谷も”という近所の人の言葉が気になった。

15

「すいません、今“渋谷も”と言ってましたが、他にも何かあったんですか？」

「そうよ、今いろんなとこで大変みたいよ。テレビは今みんな“同時多発テロか？”って騒いでて。

渋谷以外でも、札幌や仙台、新潟、長野、名古屋、大阪、広島、那覇と各地でテロが起きてるのよ。

『ウッド・ベル』とか名乗ってるやつが犯人らしいけど…」

ブッーー、ブッーー

急に携帯が震えた。

「あっ、またテレビ砂嵐になったわよ。また『ウッド・ベル』出てくるみたいよ」

いろいろ教えてくれた人は、そう言ってベランダから家の中に戻って行った。

おれは恐る恐る携帯を開いた。

また砂嵐だ…

そこに徐々に大きく映し出された…

『１２９，０８１，１１５／１３０，０００，０００』

16

文字が浮き上がると、またあのヘリウムを吸ったようなふざけた声が聞こえてきた。

「皆さん…、いかが…、でしたで…、しょうか…。

最初に…、１００万…、　ポイント…、くらいはと…、思い…、ましたが…、予定より…、やや…、ショート…、しました…。

今現在…、９１８，８８５名の…、死亡が…、確認…、されました…。

ご冥福を…、お祈り…、します…」

…チーン…

「初めての…、ゲーム…、ということで…、皆さん…、お疲れ…、かと…、思います…。

今日…、この後…、だけは…、何も…、しない…、ことを…、お約束…、しますので…、

今日は…、ゆっくりと…、お休み…、下さい…」

「ふざけんなよ！なんだよこれ！ゲームってなんだよ！こっちは死にそうになったんだよ！くそっ！」

「…ねぇ、…カズヤ先輩、…家に…帰りたい…」

ユイがやっとの声でボソッとつぶやいた。

17

辺りをみると、逃げてきた人達は、まだ座り込んでいる者もいるが、それぞれ重い足どりで歩き始めている。

まだ混乱している者、現実を受け入れた者…

「そうだねユイ、早く家に帰ろう。ちゃんと送っていくからね」

幸いなことに電車は止まっていたが、渋谷とは関係のない路線のバスは動いていた。

バスは非日常だったおれとユイを日常のように運んでいった。

「一人でだいじょぶ？今日一緒にいようか？」
こんな時だ、別にやらしい気持ちで言ったのではない。

ユイもおれも一人暮らしで、ユイを一人にするのは心配だった。

「…だいじょぶです。今日は本当にありがとうございました」

「ほんとにだいじょぶ？何かあったらすぐ電話してね。すぐ駆け付けるから」

おれ自身一人になるのがちょっと怖い部分があった。

ユイにおやすみを言うとおれも一人暮らしをしているアパートへ帰った。

18

４月１日　カズヤ宅

２３：３６

部屋へ入るなり、張り詰めていた緊張の糸が切れた。

ここはいつもおれが普通に過ごしている部屋だ。

漫画は読みっぱなし、服は脱ぎっぱなし…

おれは朝起きたままの布団がめくれっぱなしのベッドに倒れ込んだ。

…疲れた…

ふと携帯を見ると、着信あり、受信メールありになっている。

ユイからか？

『カズヤ大丈夫？渋谷から少し離れてるから大丈夫だと思うけど、無事ならいったん連絡ちょうだいね　母』

おれは、

『大丈夫だよ』

とだけ打ち込み、送信した。

ユイに電話しようかどうか迷ったが、今日は大変だったね、といった簡単な内容とおやすみ、だけを入力しメールだけで済ませた。

長い４月１日が目を閉じることで終わる。

ただ、目を閉じることで明日になる。

明日以降は何が起きるのか？

次の日起きたら夢だったらいいなと思いつつおれは目を閉じた。

19

４月２日　高知県　ヒデ宅

１０：５５

朝からテレビでは、昨日起きた国内９ヶ所同時多発テロの話題しかやっていない。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

幸いといっていいのか、四国ではどこも被害を受けていないが、テレビを見る限り各地かなり悲惨な状況になっている。

２００１年のアメリカの同時多発テロの時は、外国ということもあり危機感は全然わかなかった。

自分が住んでいる国で起きたら、頭がおかしくなるだろうと思っていた。

しかし今回、日本でテロが起きたが、自分がその現場に居合わせていないせいか、危機感は全くわいてこない。

むしろ、どんな感じか生で見てみたいという好奇心がわいてきた。

20

…人間ってこんなもんだよな…
とため息をついた。

テレビ画面の右上には相変わらず例の数字がカウントされている。

『１２８，３５５，６８０／１３０，０００，０００』

昨夜よりも７０万人も減っている。

カウンターは今もなお動き続けている。

この一晩でこれだけ多くの人が苦しみ亡くなっていったということだ。

そして、今この瞬間にもどこかで誰かが亡くなっているということだ。

とにかく自分でなくてよかったと思いつつ、大学のサークルへと向かった。

21

４月４日　四国全土

４：４４

いっせいに画面が消え、砂嵐になった。

カタカタ、カタッ、カタカタ

画面に文字が打ち込まれていく音だけがまだ夜明け前の静寂さの中に響く。

『シコクザイジュウノミナサン、

オハヨウゴザイマス。

イマカラ、

シンデクダサイ。

ドクガスヲマキマス。

タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノッテイマス。

…デハ…『

カタッ、カタカタ、カタ

『シコクヘン』

カタ

『四国編』

22

４月４日　高知県　ヒデ宅

５：１５

なんだか外が騒がしい。

昨日も大学のサークルの飲みで、帰って来たのは3時過ぎだった。

これじゃ、眠くても眠れない…。

あまりにも騒々しいので、ヨタヨタしながら部屋のカーテンを開けてみた。

視界に飛び込んできたのは慌てふためく人、人、人…。

車は猛スピードで、人混みの中を走り抜けていく。

「ん？なんだ？」

あまりにも異常な雰囲気だったので、急いでサンダルだけ履いて外に出てみた。

・・・・・・・

23

「すいません、毒ガスってなんのことですか？」

「あー、もう時間ないんだよ！携帯見てみろよ！いいから手、離せ！」

…携帯？

男はおれが一瞬手の力を緩めたのを見逃さずに手を振りほどいて逃げて行った。

おれは急いでポケットから携帯を出して開いてみた。

……

……

昨日まで平穏な生活を送ってきた。

3日前のテロをニュースで知った時も楽観的にしか考えていなかった。

理解するのに数秒かかった…

…やばい

初めて危機感が込み上げてきた…

24

おれはまず一番仲のいいアキオに電話をした。

アキオはまだ寝ていたが、今の状況を説明すると電話口でもアキオの酔いがさめていくのがわかった。

「ヒデ、これからどうするよ？」

「どうするって言われても、３日前のこともあるから逃げないとやばいだろ！

逃げてる人の話だと、四国から出ればだいじょぶって話だから。アキオ、おまえ車出してくれ！」

「車か…わかった。すぐ準備してヒデんとこに迎え行くよ！」

「あと、アキオの車５人乗りだよな？ハセガワとイワキ、マツナミに連絡しとくから３人も頼む！」

「了解、みんな近くだから１５分でみんな拾ってくよ！」

25

２０分後、予定より5分遅れてアキオの車がアパートの前に止まった。

ハセガワ、イワキ、マツナミももう車に乗っている。

アキオはある程度荷物を準備していたようだが、他の3人は着の身着のまま出てきたようだ。

おれも荷物という荷物はないが、携帯、充電器、現金、免許、簡単な筆記用具は持った。

あとは小さい頃から肌身離さず持ち歩いているお守りくらいだ。

「ヒデ、急げ！もう道かなり混んでるぞ！」

おれが車に乗ると車はすぐに発進した。

26

「道だいぶ混んでるよ。“毒ガス予告”から３０分くらいしか経ってないのにやっぱりみんな混乱してるよ」

「くそ！歩道通れよ！避けてくのめんどくせぇな！」

「ってか、信号意味ないね。人も車もチャリもみんな信号無視だよ。車線も関係ない感じだね」

「しょうがないでしょ。みんな自分が逃げるのに必死なんだよ」

「まあ、おれらもそのうちの一人だからね…」

車の外を見ると、３０分前の比ではない。

なかなか車もスピードが出せない。

27

人混みを掻き分けてやっとのことで交差点を曲がる。

ふと、急いで駅に向かっている人の中に知った顔が見えた。

同じサークルのタカハシだ。

普段から妙なテンションで無駄に絡んでくる奴で、正直嫌いな奴だ。

おれは一瞬目が合ったが、気付かない振りをした。

しかし、向こうは気付いていた。

人の間をぬって、おれらの車によってきた。

ドンッ、ドンッ、ドンッ

「おい、おれも乗せろよ！ドア開けろよ！おまえらだけ車で逃げん

のはずりぃぞ！早く開けろよ！おいっ！」

勢いでマツナミがドアを開けようとした。

「マツナミ開けるな！」

アキオが叫んだ。

「この車は5人乗りなんだ。あいつは乗せられない」

「えっ？でも…」

「ただでさえ5人乗ると狭いんだ。あいつが乗るスペースはないよ。

…あとおれタカハシ嫌いだし。

あいついっつもおれらの悪口隠れて言いまくってんだよ！マツナミも知ってんだろ？」

「それはそうだけど…」

28

確かにアキオが言うとおりだ。

タカハシはいつも仲のいいおれら5人組の悪口を他の人に言いまくっている。

それだけじゃない。

あいつに何か頼み事をしても一度も聞いてもらったことはない。

タカハシはそんなやつだ。

「席が開いてるならまだしも、満席の状態でタカハシを乗せるのはおれも反対だよ」

おれはアキオの意見に同調した。

アキオとおれが反対したことで、タカハシは車に乗せない、ということになった。

マツナミもハセガワもイワキもタカハシを普段からよく思ってなかったせいか納得したようだ。

アキオはタカハシを無視して、アクセルを踏んだ。

29

「おいっ、待てよ！待てって！止まれよ！」

タカハシは車の窓を必死で叩きながら追いかけてくる。

「アキオもっとはやく！」

「速くって言われても、人が邪魔でなかなかスピード出せないよ！」

車はタカハシをなかなか振り切れない。

それどころかスピードが落ちるとドアの取っ手をつかみガチャガチャやってくる。

１００メートル程そんなことを繰り返していたが、ドンッという音とともにタカハシの姿が見えなくなった。

すると、急にフロントガラスの上の方からタカハシの逆さまの頭が覗いた。

タカハシは逆さまの状態で顔をフロントガラスに押し付け、フロントガラスを叩きだした。

「わっ、なんだこいつ！やばいどうしよ！」

と言いながらアキオはハンドルを左右に切る。

タカハシも鬼のような形相で、車から振り落とされないようにしがみついている。

しかし、車が一瞬ブレーキをかけた瞬間、タカハシはおれたちから離れて行き、穴に吸い込まれるかのようにあっという間に視界から消えた…

ドンッ、ドゴゴ、ドン、ゴゴッ

シートベルトをしていたおれの身体が2回激しく上下した…

30

おれは…おれたちは何が起きたのか、みんなわかっていた。

ただ、自分たちがしてしまったことで身体が固まってしまっていた。

アキオはハンドルを両手でしっかり握ったまま、目を見開き前を凝視している。

おれは固まった身体の中で唯一動いた眼球を使って、ゆっくりとサイドミラーを見た…

仰向けでヒクヒク動いているように見える人間がミラーに映った。

その人間が微かに頭を動かすとサイドミラーごしに目が合ったような気がした。

と次の瞬間、後続の車がその人間を飲み込んでいった…

31

アキオは黙ったまま前だけを向き運転を続けている。

後部座席の3人も無言のままだ。

おれも何も話せない…

最後に見たミラー越しのタカハシのあの目が頭に焼き付いたまま離れない。

「なあ、悪くないよな…、…おれが悪いわけじゃないよな…」

アキオがたまらず口を開いた。

「だって、もう定員いっぱいだから乗れないよな?

それなのにあいつが車叩いたり、車の上によじ登ってきたり…実際あの時、もうあいつが邪魔で前も見えなくて…」

アキオは自分のことを正当化するかのように早口でまくし立てる。

32

おれも重い口を開いた。

タカハシがこうなったのはおれがアキオの意見に同調したからであり、おれにも責任がある。

ここで自分を正当化しておかないと持たないと思った。

「そうだよ！乗れないもんは乗れないんだから、それを無理矢理乗ろうとしてくるあいつが悪いんだよ！

あいつが諦めていればこんなことなんなかったんだろ？あいつのせいだよ！」

そういいつつも頭の中では、サイドミラーに映ったあのシーンが何度も何度も繰り返されている。

「とにかく今は逃げないと…」

33

６：１５

朝起きてから１時間。

もう昨日までとは違う。

『ウッド・ベル』の四国毒ガス予告だけでおれの日常が日常でなくなってしまった。

現におれが乗った車で人をひいている。

この混乱した中で、そのことを正当化してしまう自分がいる。

ただ、それよりも今は一刻も早く四国から逃げなくてはならない。

四国を車で出るには、３つのルートしかない。

１つ目は、今治から大島、伯方島などいくつかの島を通り広島に渡るルート。

２つ目は、坂出から瀬戸大橋を通り岡山に渡るルート。

３つ目は、鳴門から淡路島を通り兵庫に渡るルート。

他にフェリーなんかもあるがまず乗れないだろう。

今、高知にいるのでまずは高知道を北上する。

問題は高知道の川之江ＪＣＴだ。

川之江ＪＣＴがこの３つのルートのどこを選ぶかの分岐点となる。

34

１０：０３

「ヒデ、どうする？もうじき川之江ＪＣＴだよ。どっちに行く？」

アキオが久々に口を開いた。

こっちを向いた目は徹夜明けのように疲れ切っていた。

「そうだな、正攻法で最短距離を行くか、裏をかいて遠いほうで行くか…

あと、アキオ、運転代わるから、しばらく後ろで休んでたらいいよ」

渋滞の中、ＪＣＴ直前で車を側道に止めアキオと運転を代わった。

おれは運転を代わるのと同時に他の車がどこに向かうのかを注意深く観察した。

ここがポイント、ここを外すか当てるかで運命が変わる。

普段、遊び人の大学生だが妙に頭が働く気がした。

「鳴門で行こう」

渋滞の列に戻るとおれはなんの迷いもなくみんなに行き先を伝えた。

「…鳴門って一番遠いんじゃ…」

みんなからそんな声も上がったが、

「だいじょぶ、鳴門でだいじょぶだから」

というおれのなぜだか説得力のある言葉で一番距離のある鳴門に向かうことになった。

35

１９：１６

もうかれこれ半日以上たつ。

中身の全くない、異様に長く感じる時間だけが無駄に過ぎていく。

車のステレオから流れるニュースは『ウッド・ベル』のことだけでもう耳をふさぎたくなる状況だ。

さすがにうんざりしてスイッチを切ろうとした瞬間、カーナビの画面が赤く染まり、そこから血みどろになった文字が浮かび上がってきた。

『四時間四十四分』

「４時間４４分？４時間４４分…なんだこれ？」

血が滴り落ちる文字が頭に焼き付く。

時間が経つにつれなぜだか冴えてくるおれの脳みそが時計に目を向けさせた。

「…残り時間か」

日付が変わるまでの時間…

日付が変わると何が起きるのか？

毒ガスがまかれるのか？

しばらくするとカーナビにまた別の数字が浮かび上がってきた。

『候補者２５５６２８５名』

ここでもおれの脳みそは瞬時に候補者の意味を理解した。

「…四国内に残ってる人数か。候補者…」

候補者という言葉が何かひっかかる。

なんの候補者なのか。

ただ、今は言葉の意味を直感で捕らえられるほど感覚が研ぎ澄まされていた。

36

２３：１６

『四十四分四十四秒』

カーナビの数字がゆっくりと血が流れるように書き換えられた。

よく『四』は『死』だから縁起が悪い数字だとされてきた。

たしかにこの状況でこれだけの四を並べられるとそれを実感するのは容易だ。

『候補者２１３９９５２名』

カーナビに浮き上がる数字と候補者という言葉の意味を考えている間に、鳴門大橋まであと数キロの所まで来ていた。

「鳴門大橋だ、もうちょっと、もうちょっとで鳴門大橋だよ。間に合う、間に合うよ！」

アキオが視界に飛び込んできた鳴門大橋を見て叫んだ。

37

ハセガワ、イワキ、マツナミの後部座席の三人も前に体を乗り出し、アキオを急かしている。

アキオと交互に運転をしてきたおれだったが、ここ2、3時間は助手席でずっと頭をフル稼動させていた。

「候補者……タスカルホウホウ…」

ウッド・ベルの言葉が気になる。

『タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノッテイマス』

たしかこう言っていたはずだ。

逃げることが、全てではない…

ゲーム…

候補者…

38

２３：２５

「くそっ！さっきから全然進まねぇよ」

考え込んでいたおれは、アキオの苛立った声で我に返った。

ふと外を見ると鳴門大橋は１０分前とほとんど同じ位置に見えた。

ここ１０分でほとんど進んでいないようだ。

外を歩いている人にどんどん抜かされて行く。

「ねぇ、これ進まないのって前の方の人達が車乗り捨ててってるからじゃない？」

マツナミの言葉通り、車を降りてみると前も後ろも至る所で車から人が出てきていた。

「ちくしょう！車捨てろってことか！？くそっ！」

39

アキオが悔しがるのもよくわかる。

この車はアキオがずっと欲しがっていた車で先月やっと手に入れたものだった。

しかし、状況が状況なのでアキオもすぐに観念した。

おれらは車をその場に乗り捨て、鳴門大橋へと向かう列に合流した。

車を捨て、うなだれているアキオにマツナミが付き添って歩く。

そんな姿を視界の隅に置きながら、おれは頭の中で反復していた。

…逃げることが全てではない…

…ゲームに参加できることを祈っている…

「よかった、間に合った～、鳴門大橋に着いたよ～。早く渡ろう！」

イワキの声が聞こえ、おれはふと時計を見た。

「…２３時３５分かぁ」

40

２３：５５

『四分四十四秒』

『候補者２０６７０５５名』

そろそろと思い、携帯を開くと画面にはそう表示されていた。

「おい、ヒデ。ホントにおまえを信じていいんだろうな？もし違ってたらおれら…」

目の前を大慌てで通り過ぎ、橋を渡って行く人達を見つめながらアキオが聞いてきた。

２３時３５分に鳴門大橋に着いたおれらは、人の波に流されるように橋へと足を踏み入れようとしていた。

アキオもハセガワもイワキもマツナミも安堵の表情を浮かべていた。

同じように必死で逃げてきた周囲の人達の顔も心なしか明るく見える。

41

「アキオ、ハセガワ、イワキ、マツナミ。おれを信じてくれるか？」

押し寄せる人の流れの中、おれは４人を呼び止めた。

おれの頭の中は鳴門の大渦のようにウッド・ベルの言葉が渦巻いていた。

この昨日までとは違う世界に危機感を感じながらも同時に好奇心もわいてきている。

頭は幸いにもかつてないほど冴えている。

「逃げないほうに賭けてみないか？」

おれは冷静な口調で言ったが、家から逃げる時に持ち出したお守りをポケットの中でぎゅっと握りしめていた。

結局、おれの予想外の問いを受け入れてくれたのはアキオとマツナミ。

ハセガワとイワキは猛反対し、橋を渡るほうを選んだ。

「大丈夫…、大丈夫だ。…おそらくこっちが正解なはず」

42

２３：５９

「さあ、何が起きるんだ…」

最後の力を振り絞って橋に押し寄せる人。

もう０時には間に合わないであろう橋から離れた所からは罵声、最後の叫びが聞こえる。

「だいじょぶ…だいじょぶだ…」

携帯の時計はデジタル式の為、２３時５９分の何秒まで進んでいるかはわからない。

変わる、変わると思いながらも表示されている数字は５９分のままだ。

５９、５９、５９、５９、００

「あっ…」

プシュー

プシューー

プシューーー

橋の上に煙が立ち込める。

43

一気に橋方面の視界が悪くなる。

煙に覆われていく中、人が倒れていくのが見えた。

正確にいうと人混みでそれぞれ身動きが取れないため、真下に崩れ落ちていく感じだった。

『ゲームサンカニンズウ、

ヒャクキュウジュウゴマンヒャクジュウハチメイ。

マズハ、オメデトウ。

サッソクデスガ、

ゲームセツメイデス。

イマカラ、

ヨンジュウヨンニチ、ヨンジュウヨンプン、ヨンジュウヨンビョウデ、

シコク、ハチジュウハッカショ、

ギャクマワリ、シテクダサイ。

ジカンセイゲンガ、

アリマスノデ、

イソイデクダサイ。

…デハ…』

44

４月５日

０：１５

「橋にいた人はみんな死んでるよ」

毒ガスの霧が少し晴れてくると、絶望的な光景が目に入ってきた。

目の前に映る橋は命を繋ぐくもの糸だったはず。

その糸に縋り付いてきたものに容赦なく浴びせられた毒ガス。

どれも苦しみながらも、その場から逃げ出すこともできずに一塊となって死んで行ったのだろう。

「ヒデ、とりあえずおまえを信じて良かったよ。

ハセガワとイワキ…あいつらのことは忘れよう」

黙ったまま橋を見つめるおれの肩にアキオが手を掛けた。

「…あぁ」

おれはアキオに内心を悟られぬよう下を向いた。

45

『１２５，０７７，２７５／１３０，０００，０００』

『参加者１９５０１１８名』

周りの人の話によると、橋を渡って本州へ辿り着いた人も原因不明だが次々と倒れて亡くなっているという。

おそらくそれぞれの橋を渡る際に何らかの毒物が仕掛けられていたのだろう。

故郷の四国を捨て、真っ先に逃げ出したものは死に、とどまったものが生き延びた。

「アキオ、マツナミ。おれらの選択は正しかったみたいだよ」

「まあな、あのまま橋渡ってたら死んでたもんな」

「いや、そのことじゃない。今始まったこのゲームのことだよ。ゲームクリアの条件はなんだっけ？」

おれは下を向いたまま、顔がにやけるのを我慢しながらアキオに聞いた。

46

「ゲームクリアの条件って、ウッド・ベルが言ってた、『八十八ヶ所逆回り』のこと？」

「そう、それだよ。まずはゲーム参加メンバーに選抜された。これで第一関門は突破した。

で、この第一関門を突破したやつは今どこにいるのか？

大きく分けて二つのグループに分けられるだろう。

まずは、ウッド・ベルの警告を無視し、四国に残ったもの。

もう一つは四国を出ようと三つの橋に向かったが間に合わなかったため、運よく生き残ったもの。

前者は各々自宅付近にいるだろう。そして後者はそれぞれが向かった橋の近くにいるだろう。

この中で正しいスタート地点にいるのは…」

47

「あっ、おれらだ！おれらだよ！四国お遍路八十八ヶ所目はたしかこっちのほうだよ。なぁそういうだろ？」

「そう八十八ヶ所目は香川県さぬき市にある大窪寺。

三つの橋の位置で見ると、瀬戸大橋と鳴門大橋がこの大窪寺に近くなる。

3分の2の確率だが、今治を選んでなくてよかったよ。

ゲーム参加人数が195万ってなってたけど、実質すぐに大窪寺に動ける人間、広くみても今香川県にいるもののみ正式な参加メンバーになるんだろうな」

「なんか今日のヒデなんか違うね…」

ふとつぶやいたマツナミの声が聞こえた。

確かにいつものおれと違うのは自分でもわかっている。

だが、抑え切れない程の鼓動が全て自分の力へと変わっているような気がした。

「さて、大窪寺に向かうか」

48

４月１０日　新潟　米問屋事務所

８：００

今日も朝から『ウッド・ベル』のニュースばかりだ。

寒い冬がやっと去ろうかという中、身も心も温まるような話題はないものか。

会社は売上、売上。

テレビをつければ『ウッド・ベル』、『ウッド・ベル』。

『ウッド・ベル』が登場し、渋谷だけならまだしも、四国が閉鎖されてしまった関係で会社の売上はうなぎ登りだ。

上司の機嫌もいい。

ただ、休みもなく働かされる現場の身にもなってもらいたい。

所詮、会社の売上が上がっても現場の給料には反映されないのだから。

今日も一時間仮眠をとっただけ。

日本がこんな状況でも仕事だけは待ってはくれない。

「今日も部長に怒られに行くか」

気合いを入れて米を保管している倉庫へと向かった。

49

「今日もこれ全部運ぶのか…これだけの量をこの時間で運べってか」

「ケイスケはまだいいほうだろ。おれはこれだよ」

同僚のスズキが山積みの米にもたれかかって言った。

「みんなびびって食料のまとめ買い。せっかくまとめ買いしても『ウッド・ベル』が現れて毒ガスまかれたら意味ないのにねぇ」

スズキはそう言うが、おれも実は四国の件があった次の日にスーパーでカップ麺やら缶詰やらをまとめ買いしていた。

ブー

ブー

「ん、また緊急速報か」

四国でのことがあってから、何かあると携帯に緊急速報が流れるよ

うになった。

50

「そういえば今朝のニュースでやってたけど、あの日に四国から出た人昨日まででみんな死んだらしいね。

ん？大窪寺が全焼…同時刻に大窪寺に辿り着けなかったと思われる人達が次々と死亡…だってよ」

「あれから5日経つのにまだ政府は四国に入れないんだろ？なんかよくわからないバリアのせいで」

「翌日に助けに向かった自衛隊が上陸できずに全滅だもんな。おとといは政府の包囲網を抜けて四国に入ろうとしたやつが遺体になって本州に流れ着いたって話だしね」

今四国は完全に封鎖されている。

入ろうにも入れないからだ。

四国内での現在の状況は、今『四国編に参加している』メンバーからの携帯での情報のみしかない。

「まあ、それよりおれらはこの米を運ばないとね」

51

４月１５日　新潟　ケイスケトラック

８：１８

『１２１，９８８，２２６／１３０，０００，０００』

あれから１０日が経った。

相変わらずカウンターは下がり続けているが、仕事は忙しい。

今日は一睡もしていない。

朝から米をトラックに運び込み、またいつものルートを走っている。

もう少しで最初の配達先に着く頃だ。

ため息まじりに携帯を閉じようとすると、砂嵐が現れ、文字が浮かび上がった。

『ノウカノミナサマ、

オハヨウゴザイマス。

キハ、ジュクシマシタ。

ニホンハ、コメニ、ササエラレテ、キマシタ。

イマカラ、ソノコメニ、ホロボサレルノハ、アナタタチデス。

クワレルマエニ、クラエルカ。

…デハ…』

カタッ、カタカタ、カタ

『　コメソウドウ　』

カタ

52

『米』という文字を見たおれは悪寒が走った。

普段見慣れた、日常扱っている『米』という文字を『ウッド・ベル』が使ったことで、身近なところで何かが起こるのでは、という思いがした。

「機は熟したって…」

と、考える間もなく、配達先に着いた。

「まずは目先の仕事終わらせねぇとな」

この配達先は四国の件があるまでは日中に運んでいたが、あれ以降納品量が異様に増えたため、オープン前の朝に納品させてもらっていた。

「すいませ～ん」

搬入口の電気が付き、中で物音がするが鍵を開けてもらえない。

とりあえず荷物を先に降ろしておこうとおれはトラックに戻った。

ガサガサ、ガサ、

ガサガサガサ、ガサ、ガサガサ

「ん？荷台の中から？なんだ？」

53

荷台の扉に手をかける。

ブー

ブー

緊急速報…？

ハッとしたが、おれの扉を開ける手はもう止められなかった。

黒い塊が開いた扉から一斉に噴き出してきた。

顔面、腹、脚と体全身に襲い掛かる。

半開きになっていた口にその物体が飛び込んできた。

「ゲ、ゲホッ」

吐き出そうとするが、黒い塊の圧力があまりに激しく、身体にまとわり付いていたため、逆に飲み込んでしまった。

トラック内の黒い塊は一時はおれの身体を飲み込んだが、気が付くとおれを中心に四方八方に飛び散って行った。

喉に奇妙な感覚を覚えながら、おれはその場にへたりこんだ。

54

「…なんだったんだ…あれ…」

ブー

ブー

携帯の緊急速報がなり続けているのにやっと気付き、携帯の画面を慌てて開いた。

『８：２２　ウッド・ベルによる犯行予告と同時に米から大量の謎の虫が発生。この虫が人を襲い、各地で死亡者が出ている』

『８：３０　現在手元にある米は容器に入れ密封すること。スーパー他、米を扱っているお店は店を閉め鍵をかけ避難すること』

ブー

ブー

続けざまに緊急速報が入る。

『８：３３　この虫は新潟県産の米のみから発生。５ｋｇ一袋分で人一人を襲い、食べ尽くした後、その場で死骸となる』

トラックの荷台を見ると、限界まで積んでいた米の姿はなく、新潟県産こしひかり１００％とかかれたビニールの袋だけが残っていた。

55

ふと納品先の店内が気になった。

軒先の電気は朝にも関わらずついているが店内は薄暗い。

「おぇっ」

近付いて見ると、店内は例の虫が飛び回り、薄暗い雰囲気をかもし出していた。

店の自動ドアにへばりついているものを見ると、なんとも不気味な容姿が判明した。

ゴキブリとコオロギを足して2で割ったようなみたこともない生き物だ。

大きさは5ｃｍほど。

あの小さな米粒からどう生まれたのか？

「うげっ、おれこんなもん飲み込んだのか…」

店内の奥の方を見ると理科室にあるような骸骨が寝転んでおり、周りには虫の死骸が転がっている。

「おれもあのままだったら、こうなってたのか…そういえば、スズキは…」

スズキに電話をすると無事だった。

スズキのトラックの荷台にはまだ大量の虫が詰まったままであり、そんな状態なので、途中でトラックを動かせなくなっているとのことだった。

そんなに遠い所ではなかったのでおれは空のトラックでスズキを迎えに行った。

56

９：５４

「ケイスケ、よくトラック一杯分の虫に襲われてだいじょぶだったな」

「まあね、何が起きたかわかんなかったけど、なんか助かったよ」

「まさか自分がこんなことに遭遇するとは思ってもみなかったな。新潟県産だけなんだよな、虫が発生したの」

「そうみたいだね。被害はやっぱり新潟中心だけど、全国各地で被害出てるみたいだね」

いまだに緊急速報がなりっぱなしの携帯を見ると、

『１１０，５９２，９０３／１３０，０００，０００』

かなり減っていた。

それだけ新潟のお米が日本人に支持されていたということになるが、逆にそれが悲劇を大きくしてしまったとも言える。

57

おれとスズキはこの状況で何をどうすればいいかもわからず、とりあえず事務所に戻ることにした。

街中には無数の黒い塊が徘徊していた。

地面には所々黒い塊が落ちている。

その隙間からは白い骨のようなものが覗いていた。

スーパーやドラッグストアなどお米を扱っている所はほぼシャッターが降りている。

降りていない店もあるようだが、よく見てみると、おそらく従業員が全滅しているであろうことがわかった。

民家も同じく人の気配がなく、生活の跡だけがそのまま残されている所が多い。

中にはおれらと同じように助かった者もいたが、力無くその場にうずくまっていた。

おれは普段は１５分で駆け抜ける道を４０分かけて事務所へ戻った。

58

１０：５０

事務所に着くとワタナベ所長と事務のクサカベさんが外にいた。

「おっ。おまえらよく無事だったな。詳細はさっき電話で話した通りだ。急にだったからな…」

事務所と米保管の倉庫はくっついていた。

そんなに大きくない事務所だったが１０名が事務所内で犠牲になった。

ドライバーはおれとスズキ以外はまだ連絡が取れていないらしい。

「この音聞こえるだろ。忌ま忌ましい音だよ」

倉庫からはガサガサを通り越して、ゴォーという音が聞こえる。

振動で倉庫が破壊されそうな程の轟音だった。

59

「所長、ケイスケのやつ一旦あの虫に襲われたのに生きてたんすよ。トラックに積んでたやつ全部に襲われたのに無事だったんすよ。ホントに奇跡っすよ、奇跡」

「あいつもか。いや、事務のクサカベさんも一回は取り囲まれたのに喰われずに済んだんだよ。隣のササキくんはあっという間に喰われてしまったんだがね」

「へぇ、意外に助かってる人もいるんですね。所長はどうやって助かったんすか？」

スズキがワタナベ所長の機嫌を取りながら話している脇でクサカベさんがおれに耳打ちしてきた。

60

「所長…みんなを盾にしたんです。あの虫が迫ってきた時に、ササキさんもあたしも逃げようとしたんですけど、あたし達、所長に掴まれて、虫が来るほうに蹴飛ばされたんです。

あたしは運よく無事だったんですけど、ササキさんは横であの虫に…」

所長らしいと言えば所長らしい。

普段から威張り散らし、機嫌が悪くなるとすぐに部下にあたる最悪な上司だった。

おれはあまりご機嫌取りがうまくないせいでいつも、イライラをぶつける矛先にされていた。
その点、スズキはうまくやっている。

多少は怒られることもあるが、所長からはかなり気に入られている。

スズキは一緒に酒を飲む度に社会でうまくやっていく重要性を毎回毎回耳にタコができるほど説いてくる。

「所長が死ねばよかったのに…」

クサカベさんが最後に発した言葉に少し恐怖を感じた。

61

４月１６日　ケイスケ宅

８：００

久々に１２時間寝た。

ここ二週間、働きっぱなしだったため、体は相当疲れていた。

本来はもう米の配送という仕事はないため、もっと寝れるはずだったが、所長から事務所周りの片付けに来いとの指令が入ったため、事務所へ行くこととなった。

布団をたたみながら、職がなくなるであろうことと台所の隅においてある米びつのことを考えるとため息しか出てこなかった。

「これから、日本はどうなるんだろ…自分はどうなるんだろ…

…

……自分とクサカベさんはなんで助かったんだろ…」

62

事務所に着くと昨日のメンバーに加え、おれらと同じドライバーのヨシノがいた。

ヨシノはドライバーの中では一匹狼的な存在で誰ともつるまない。

所長といいヨシノといい、人間的にどうかと思うやつばかり助かっていてなんだかあまり気分はよくない。

「さあ、掃除始めろ〜」

いつものようにこいつは命令するだけで一切自分ではやろうとしない。

「もうちょっとスピード上がるだろ。なんとか今日中には綺麗にしてくれよ」

結局、倉庫周りと事務所周りの虫と白骨を片付けるのに丸二日かかった。

この間に、この虫に対する対処法が見つかった。

63

それは『水』だった。

人間の約６０％は水分であり、この虫はその水分が体の中に、ある一定量たまると動けなくなり死ぬとのことだ。

そしてこの虫は『人喰い虫』と名付けられていた。

「おい、みんな集まれ」

三日目の解散時、所長がとんでもないことを口にした。

「事務所には大事な書類がある。取引先にも早く連絡しなきゃならん。人喰い虫が水で退治できることもわかったことだし、事務所に入って必要な物を取ってくるとしようか」

おれは最初反対したが、書類さえ手に入れば給料を払えるとの言葉に流され、事務所への突入を決心した。

64

４月１８日

１３：００

「突入の際の確認だ。よーく聞いとけよ。まず今回の目的は事務所内の重要書類を手に入れることだ。

ただ、現状は窓から見えるように中は人喰い虫が充満している。事務所と倉庫をつなぐドアが開いているからだ。

まず、事務所内のやつをやっつけ、そのドアさえ閉められれば、もう事務所内に人喰い虫が入ってくることはない。

いいか、わかったか？じゃあ、担当を発表する。まずは…先頭はおまえだ」

所長の指先はまっすぐおれを指していた。

「えっ？おれですか？」

65

「そうだ。ここにホースが2本ある。このホースで水をまきながら中に入るんだ。二番手はヨシノ、おまえが行け。

スズキとクサカベさんは事務所の入口のドアを開ける係だ。万が一外に人喰い虫が出てくるようなら入口に用意してあるバケツの水を使ってくれ。

最後におれはここで蛇口の開け閉めをやる」

「えっ、所長は中に入んないんですか？」

「当たり前だろ。ホースは2本しかないんだ。だいたいおれがいなきゃ指揮するやつがいないだろ」

確実にハズレくじを引かされた感じだ。

やはり所長はくそだ。

しかし、だれかがやらないといけないことなので諦めて自分がやることにした。

一旦襲われたのに大丈夫だったこともあるので、それを含め意外と緊張感は湧いてこなかった。

66

１３：５９

「さあ、準備はいいか？１４時になったら作戦開始だぞ。

…

……

さあ、カウントダウンだ。１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１、ゼロ。ドア開けろ！！」

合図とともに事務所の入口のドアが開けられた。

中にいた人喰い虫は、今までなかった所に急に空間が現れたため、一瞬動きが固まったが、一斉に新しく開いた空間へ進もうとした。

そこへすかさず、おれとヨシノがホースで大量に放水を始める。

情報通り、水を浴びた人喰い虫はバタバタと床に落ちていった。

67

おれはおれの生活を目茶苦茶にされた恨みを晴らすべく、飛び回っているやつにも、もう力尽きて床に這いつくばっているやつにも容赦なく水を浴びせた。

ほぼ入口付近を制圧したと思ったとたん、急にヨシノが事務所に飛び込んだ。

「ばか、まだ中にはいっぱいいるんだぞ。くそっ！」

ヨシノの単独行動におれも突入しなければならない雰囲気になった。

多少恐怖はあるが体は動くようだ。

「うおぉぉー」

おれは叫びながら事務所に突っ込んで行った。

68

事務所内は真っ黒の塊で覆われていた。

足元は退治した人喰い虫の死骸が山になっており前に足を進める度に膝下まで埋まる。

もちろん靴の中もいやな感触であふれかえる。

目的は事務所と倉庫をつなぐドアを閉めることだ。

先に突入したヨシノの後を必死で追い掛ける。

ヨシノに襲い掛かる人喰い虫に必死で水を浴びせる。

ヨシノの単独行動があったものの事務所の半分くらいの所までは順調に来ている。

「ヨシノ！もう少しだ！がんば…おい、なんだよ、これ…水が…」

来た道を振り返ると人喰い虫の屍の山の向こうに所長が慌てふため

く姿が見える。

所長の足元にはホースの端が転がっている。

「くそ！あのカスが！ヨシノ！引き上げ…」

ヨシノにもう水が出ないということを伝えようとした瞬間、急に前からヨシノが現れ、突き飛ばされた。

おれは人喰い虫の山に倒れ込みながら叫んだ。

「くそー！どいつもこいつもくそやろブブブ」

最後の言葉は襲ってきた人喰い虫に覆われ、言葉にならなかった。

69

一度体験した黒い塊の圧力に懐かしさすら感じるほど、体に力が入らない。

さすがに今回はだめか。

でも、いっか。

おれのために泣いてくれる人もいないし…

クサカベさん…

黒い塊の圧力はどんどん増していく。

喰われて死ぬのが先か、それとも押し潰されて死ぬのが先か。

どうせ喰われるなら死んでからのほうが苦痛が少ないのかな。

いろいろな事を考えているうちに不思議と体の神経が全てなくなり、唯一動く脳みそだけが自分になっていく気がした。

死ぬ時はこうやって死ぬのかぁ、意外と楽に死ねるんだなぁ、と安らかな気持ちになって行くおれの脳みそに誰かの声が侵入してきた。

「おい、大丈夫か！」

70

その言葉を脳みそではなく、耳でキャッチした瞬間、おれの神経は脳みそからそれぞれの故郷へ戻って行った。

おれ本来の体に戻ったおれは全身がびしょ濡れになっていることに気付いた。

「おい、大丈夫か？大丈夫なら、手伝え。おれ一人じゃ限界がある」

そう淡々と話す声は、ヨシノだった。

ヨシノの手にはポットややかんが握られており、それで水をばらまいていた。

「給湯室の水道を使え。水は出しっぱなしにしてある。コップや皿しかないが自分で考えてどうにかしろ。おれ一人じゃ全部は無理だ」

ヨシノはおれの上に覆いかぶさった屍を足で振り払い、給湯室に水を確保しに戻って行った。

「また生き残った…」

71

しかし、そんなことを思うのもつかの間。

黒い塊が襲ってくる。

おれは給湯室へと必死で向かった。

給湯室の入口でヨシノとすれ違う。

おれは給湯室にある水が入るものに手当たり次第水を入れた。

給湯室の外で水を使い果たしたヨシノが給湯室に戻ってくる。

ヨシノはおれが水を入れた容器を持ってまた給湯室の外に飛び出して行く。

そんなことを数回繰り返しているうちに、おれは流しから水を溢れさせることを思い付き、流しの排水溝を塞いだ。

しばらくすると水は流しから溢れ出し、給湯室の外へ流れて行った。

72

ただこれだけでは飛んでいるやつらはやっつけられないし、やっつけてもやっつけても倉庫から事務所へとやつらはなだれ込んでくる。

やはりあの倉庫と事務所をつなぐドアを閉めるしかない。

おれは所長が水道から外したホースをたぐりよせ、事務所と給湯室を行き来しているヨシノに叫んだ。

「ヨシノ！やりながらでいいから聞いてくれ！このままじゃ、らちがあかない。おれが一気に倉庫のドアまで突っ込むから、ホースで支援してくれ」

「わかった」

ヨシノからはいつもと変わらず無愛想な応えが返ってきた。

73

人喰い虫は水に弱い。

おれは少しの足しにでもなればと、頭から水をかぶった。

そして手に持てるだけの容器を準備し、作戦開始のタイミングを伺った。

「行くぞ！」

おれはホースを水道に差し込み、ヨシノと共に水の入った容器を持って給湯室を出た。

今まではヨシノ一人だったが、今回はおれが加勢したことにより、人喰い虫はいつもよりやや後退した。

おれとヨシノは給湯室に駆け戻り、おれは突入用に準備していた容器を手に持ち、ヨシノはホースを手にし、給湯室を飛び出した。

「うおぉぉー」

74

おれは肝心な所にくるとこの叫び声になるんだな、と今さらながら気付いた。

また生きて、この「うおぉぉー」を言えればいいなという思いと、「クサカベさん…」という文字が頭の中に浮かんだ。

人喰い虫は先程のおれとヨシノのダブルアタックからまだ態勢を立て直せていなかった。

おれはヨシノの放水の援護をもらいながら黒い塊へと突っ込んで行った。

人喰い虫が体に絡み付いてくるが、頭から水をかぶったのが効いているせいか、力無く剥がれ落ちて行く。

この手持ちの容器は最終兵器だから最後のドアノブにたどり着くまでは使えない。

が、最初に比べ突進する速度は下がっている。

まだドアノブは見えない。

おれはどこまでもつのか。

まだこの切り札を使ってはならない。

いろいろな葛藤の中、限界を迎えた。

75

「くそっ！もう使うしかねぇか！くそっ！」

ドアノブが見える前には使いたくなかったが、左手に持っている容器の水を前方に浴びせ掛けた。

しかし、ドアノブは現れなかった。

「くそっ！残り一個。こいつでうまく行かなかったら最後だ。くそっ！」

最後の力を振り絞り、右手をふりぬいた。

飛び散った水を避けるように、人喰い虫が隊列を崩した。

そしてその隙間から銀色に光るドアノブが顔をのぞかした。

目の前にある塊が人喰い虫だかドアだかわからなかったが、おもいっきり蹴飛ばした。

ガチャン！

塊は1メートルほど前に吹き飛び、ドアが閉まる音がした。

ドアについていた人喰い虫はドアが閉まった衝撃で一旦は下に落ちかけたが、態勢を立て直し一斉におれに向かって飛んできた。

「ヨシノ。これで最後だ」

「わかった。」

相変わらずのトーンで後ろからおれの頭上を越して、放水がされた。

76

今までは倒しても倒しても倉庫から事務所内に流れ込んできていたが、ドアを閉めたおかげであっという間に人喰い虫を駆逐できた。

ほんの5分程前までは真っ暗に思えていた事務所内は蛍光灯の明かりで隅々まで照らされるようになった。

ただ、いつもと違うのは足元に積み重なったこの死骸の山と事務所と倉庫をつなぐガラス窓から見える倉庫内の景色だ。

「これだけ殺しても、まだ中にこんだけいるのか…」

倉庫内の人喰い虫は、おれらが事務所に突入したことにより、パニックになっているようだ。

ガラス窓がメキメキと軋む音と建物がギシギシと唸る音がする。

「けっ、事務所が汚い虫だらけになっちまったな。まあ、おまえらよくやったよ。あ〜、きたねぇ。後でこのゴミの山処理しといてくれよ」

足の踏み場もない事務所の中に足を踏み入れながら、ワタナベ所長が言った。

77

「所長、ちょっと聞きたいんですけど、なんでホース抜いたんですか？あれは抜けたんじゃなくて、あんたが抜いてましたよね？」

「あ？あれか。しょうがないだろ、おまえらがちゃんと処理していかないから、何匹かあの虫が外に出てきたんだよ」

「何匹か？おれとヨシノはこの中で何万もの人喰い虫と闘ってたんだよ！それをたった数匹出てきただけでホース抜いた？

あんたおれらのこと何も考えてないんだろ。ふざけんなよ！」

「おまえいつからおれにそんな口を利くようになったんだ？いやなら辞めてもらって結構。もうおまえには払う給料はない」

78

「そういうことだ、おまえみたいな出来損ないはこのガラスの向こうにいる虫に喰われちまえばいいってことだよ。ね、所長」

スズキが急に割り込んできた。

「そういうことだ。スズキにはこれからおれの右腕となってやってもらう。

おまえみたいな使えないやつはいらないんだよ。よし、こいつに払う給料がなくなった分、おまえの給料を上げてやろう」

「いやぁ、光栄っす。所長、ありがたいお言葉頂戴致します」

そういえば、突入作戦の時、スズキは安全な後方部隊を任されていた。

「スズキ…おまえ、裏切ったな…」

79

「裏切った？聞き捨ての悪いことというなよ。貧乏人のおまえなんか元々なんとも思っちゃいないよ。世の中喰うか喰われるかだよ。

ヨシノとクサカベさんはどうする？はは、喰うか喰われるかって、クサカベさんはもう喰ってたか、この虫」

喰うか喰われるか…

どこかで聞いたような…

「あっ…」

『ウッド・ベル』の犯行予告だ。

『イマカラ、ソノコメニ、ホロボサレルノハ、アナタタチデス。

クワレルマエニ、クラエルカ』

喰うか喰われるかではない。

『喰われる前に喰らえるか』だ。

もしかしたら…

ある一つの仮説が頭の中で組み立てられた。

パキ、パキパキ、パキ…

80

何の音を振り向かなくてもだいたいわかった。

「逃げろっ！！」

普段一切大声を出すことのないヨシノが地割れがおこりそうな程の声で叫んだ。

全員が事務所の入口に体を向けた途端、ガラス窓が吹き飛んだ。

入口に近いのは、クサカベさん、スズキ、おれ。遠くにいるのは所長、ヨシノ。

真っ先に逃げ出したスズキは、あろうことか前にいるクサカベさんの肩に手をかけ弾き飛ばした。

「スズキ！てめぇ！」

おれはクサカベさんを助け起こそうとした。

所長がその横を通り過ぎたと思いきや、振り向きざまにおれを蹴り飛ばした。

81

「くそっ！てめぇら、やっぱりそういう人種か！ちきしょう！」

倒れたおれの腕の中にはクサカベさんがいる。

ガラス窓から人喰い虫が噴き出している。

おれはどうすれば…

すると、所長の後ろから現れたヨシノが所長の腕を掴んでガラス窓のほうへ投げ捨てた。

そして一瞬の間におれとクサカベさんの腕を掴み、引っ張り上げた。

「急げ。」

先程の地鳴りがするような声ではなくいつもの無愛想な声でヨシノが言った。

ちらっと視野に入った所長はすでに、ほぼ全身が黒い塊に飲み込ま

れていた。

82

おれとヨシノがクサカベさんを引いて入口へと足場の悪い道を通って進んで行く。

あと少し、あと少しというところで、ヨシノが屍の山に足を取られ転倒した。

おれとクサカベさんが止まって振り返る間もなく、ヨシノの声が聞こえた。

「行け。」

こんな時も無愛想かよ！

おれは心の中で思った。

ヨシノが言うように、今立ち止まったら、確実に三人とも黒い塊に飲み込まれる。

クサカベさんは止まろうとしたが、おれはクサカベさんの腕を引っ張り、入口へと向かっていた。

「ダイちゃんっ！」

クサカベさんの発した言葉に一瞬おれはダメージを受けた。

しかしおれはすぐにその言葉の意味を理解できた。

おれが今やれること、やりたいことは、クサカベさんを泣かせないこと。

そのためにはクサカベさんを無事に脱出させ、ヨシノを助けること。

83

おれはクサカベさんを入口の外に突き飛ばし、すぐにドアを閉め、襲い掛かってくる人喰い虫の中に飛び込んだ。

黒い塊の力は強く、思ったように前に進めない。

ヨシノまでたったの5メートル程なのに足がなかなか前に出ない。

おれは大丈夫、大丈夫といい聞かせ、力を振り絞る。

気が付くと無意識のうちにまた叫んでいた。

「うおぉぉー」

かつてないほどの叫びに、目の前の黒い塊がバラけた。

その隙にヨシノと思われる黒い物体に飛び付いた。

塊の隙間からヨシノが見えた。

まだ間に合う。

九割九分は確信を得ていたが一分は賭けでもあった。

84

「ヨシノ！なんでもいいから飲み込め！早く飲め、飲み込めよ！ウッド・ベルが言ったように、こいつらに喰われる前に喰えば、助かるんだよ！いいから喰えよ！クサカベさんが待ってんだろ！」

おれはヨシノまでギリギリ届く右手でヨシノの口に人喰い虫を無理矢理に押し込み、口を押さえ込んだ。

数秒前まで見えていたヨシノの顔はもう見えない。

おれもヨシノも人喰い虫に完全に覆われた。

もう窓から差し込む太陽の光も事務所の蛍光灯の光も届かない漆黒の世界へとなっていた。

「うおぉぉー」

おれは手の感覚だけを頼りにヨシノの顔が潰れるくらい口を押さえ込んだ。

85

４月１３日　北海道　網走刑務所

１８：０８

なんでおれはこんなとこにいんだよ…

なんもやってないのに…

それにしてもなんでおれがあの防犯カメラに映ってたんだ…

あいつはなんであんな証言したんだ…

たしかにカメラにおれ？が映っていた。

証言したあいつが嘘をついているようにも見えなかった。

「おい、ミドリカワ、着いたぞ。今日から死ぬまでここだから、覚悟しとけよ。わっはっはっは」

人をおもいっきり見下した態度を取る看守だ。

おそらく受刑者がいない世界にいれば、周りから気持ち悪がられるタイプだろう。

それよりも、これから先、もしかしたら一生を過ごすことになるかも知れない、この目の前の要塞をどうするかを考えなければならない。

86

おそらく、あれだけの証拠があれば再審は無理だろう。

誰の目から見てもおれがやったようにしか見えない。

しかし、おれは何もやっていない。

人を刺すなんてことは絶対にしない。

普段は血を見るだけで、頭が痛くなる。

そもそも、被害者はおれが愛していたものなのだから。

そうは言っても、この現状は変わらない。

このまま無実の罪を被せられたまま、こんなとこで死ぬわけにはいかない。

なんとかしてここを抜け出し、自分で調べるしかない…

そして、必ず見つけだし復讐しなければ…

87

～2年前～

8月15日　新潟

23：35

「お～い、エミコ～、なんかあったか～」

おれは今朝からメールの返信もなく、電話も繋がらないエミコが心配になり、エミコのマンションにやってきた。

ドンドン

「お～い」

ふとドアノブに手をかけると鍵が開いていた。

あれ？

中にいるのか？

「エミコ～、入るよ～」

ドアを開けると、背筋が凍るような冷気が顔の脇を抜けて行った。

特に霊感は持ち合わせていないが、空気だけでやばいことになってることがわかった。

「エミコー！エミコ、エミコーー！」

88

凍り付くような冷気はエミコが発していたのだろう。

リビングのドアは開いており、白の絨毯と真っ白でくすみのない純白な肌をした脚が見える。

近付くにつれその透明感のある脚からもも、腰が見えてきた。

座っているのではない。

仰向けに倒れている。

さらに恐る恐るドアに近づきリビングを覗き込んでみると、今までの純白の景色が一転、真っ赤に染まった世界が広がっていた。

赤い世界を作っているであろう中心地には、この世界の根源となるものが存在した。

見覚えのある形のその凶器は、以前とは違う真っ赤な色をしていた。

おれは玄関のドアを開けた時から、なんとなくこれに近いイメージが出来上がっていたため、実写を見ても動揺せずにすぐに１１０番できた。

89

４月１５日　北海道　網走刑務所

８：３０

「ぎゃあーー」

鉄格子の向こうを看守が走り抜けた。

何かに追われているようだ、と思った途端、今度は黒い塊が鉄格子の前を通過した。

「ぎゃあーー……あっあ……」

「おいおい、なんだよ、あれ」

黒い塊に飲み込まれた看守の声はもう聞こえない。

よーく見ると黒い塊は小さな虫の集まりだった。

「看守さーん、大丈夫ですかー？」

しばらく待っても返事はなかった。

代わりに黒い塊の一部がくずれ落ちた隙間から、頭蓋骨が現れた。

「うわぁ。…喰われた…のか？」

90

何が起こっているのか全くわからないおれだったが、刑務所に入れられている身としてはどうすることもできなかった。

そして、半日、あの頭蓋骨になってしまった看守以外の看守は鉄格子の前に現れなかった。

変化があったのは夕方のことだった。

「お～い、こっちに残り一人いるぞ。全滅だなこりゃ。」

「でもまあ、看守でよかったよ。これが囚人だったら、世間から何を言われるかわかったもんじゃない。」

声だけしか聞こえないが、おそらくここに関係する者だろう。

あいつらは何か知っているのか？

「すいませ～ん。何かあったんですかー？」

「……」

確実に聞こえているはずなのだが返事はなかった。

91

〜2年前〜

8月17日　新潟

9：30

ドンドンドン

おれは玄関を叩く音で起きた。

昨日は一日警察と一緒だったため、異様に疲れた。

せっかくその疲れを取るために熟睡していたのに、それを邪魔された挙げ句、最悪な未来へと引っ張られて行った。

「おまえだろ？」

取調室に入ると一言だけで聞かれた。

「は？」

「おまえだろ？お・ま・え・が・やっ・た・ん・だ・ろ？」

ムカつく喋り方だ。

それはいいとして、おれには何がなんだかわからなかった。

いきなり任意同行を求められ、警察に連れて来られ、訳のわからない質問をされている。

92

「なあ、彼女とけんかしてついやっちゃったんだろ？殺した後、怖くなって自分で通報した。そうだろ？」

「はあ？何言ってんですか？おれがエミコを殺したってんですか？ふざけるのもいい加減にして下さい」

といいつつ、警察はふざけてなんかいないということはわかっていた。

どんな些細な動きも見逃さない、そんな刑事の目でおれを見ていることは百も承知だった。

おれはなぜおれに容疑がかかっているのかを冷静に聞き出そうとした。

「おまえ、通報する前にも彼女の家行ったんだろ？彼女を殺しに」

「何言ってんですか、おれはあの日朝からエミコと連絡が取れないんで、様子を見に行っただけですよ。そしたら、エミコがあんなことになってて…」

93

「じゃあ、確認するが、おまえが彼女の家に行ったのは、その一回だけなんだな？じゃあ、マンションの防犯カメラにおまえが二回映っていたとしたらどう説明するんだ？」

「えっ？」

「おまえが通報する3時間前、おまえが被害者宅に行ったのが防犯カメラに映っているんだよ」

そんなはずはない。

おれは朝起きてから夜エミコのマンションに行くまで一日家でゴロゴロしていた。

「おれは今日一日…」

ガチャ

取調室に入ってきた男が目の前の男に何やら耳打ちをした。

「ふふ、ミドリカワ、長い一日になりそうだな」

94

４月１７日　北海道　網走刑務所

４：５０

「あー、腹減ったー！なんか持って来いよ！このままじゃ、死んじまうぞ！」

隣にいる囚人がどうにもならない中、喚きちらしている。

たしかにもう腹が減ってどうしようもない。

看守が変な虫に襲われた日以来、だれもここに入ってこない。

「これがここの手口なんだろ？」

また隣の囚人が怒鳴り始めた。

「散々おれらを弱らせて、連れてくんだろ。おれは知ってんぞ。昔ここに収容されて大量に死んで行った奴らを。

でも、奴らは死んじゃいない。死んだことになってるが連れてかれただけだ！おれらも連れてくんだろ？ここの『地下帝国』に！」

地下帝国？

おれは馬鹿馬鹿しいと思いながら、そんな妄想から生まれた言葉が頭の片隅に焼き付いた。

完全に外界から放置されているこの檻の中にいるということは、誰かの助けがないと生きていけない。

あんなくそ看守でもいてくれないとおれらは生きていけないのだ。

95

網走刑務所は、１８９０年にその歴史が始まった。

当時はエアコンなんていう便利な代物はなく、北海道という土地柄から冬は相当劣悪な環境だったという。

囚人達は、過酷な環境の下、道路整備などの肉体労働を課せられ、多くの囚人が命を落とした。

また、脱獄王と呼ばれる人物が出てくるなど、刑務所の代名詞となっていったのがこの網走刑務所だ。

普通に考えれば、地下帝国なんてものは存在しないと切り捨てるだろう。

しかし、目の前で起きた出来事と無実であるはずの自分がここに連れられてきていることから、何か違和感を感じた。

とはいえ、まず解決すべきことはおれの事件だ。

おれの無実を証明するために、打ち破らないとならない関門が三つ

ある。

96

一つ目が、防犯カメラに二度おれが映っていること。

二つ目が、凶器に残されていたおれの指紋。

三つ目が、犯行時間帯にエミコの家に入って行くのを見たという、おれの友達のカオルの目撃証言。

特に問題なのが、防犯カメラの件とカオルの目撃証言だ。

この二つを説明しない限り、おれの無実が証明されないだろう。

おれはあの日、たしかに一回しかエミコのマンションには行ってない。

それが、二回行ったことになっている。

防犯カメラも調べなくてはならないが、カオルがなぜそんな証言をしたのか直接話を聞かないことにはどうしようもない。

もしかしたら、カオルが犯人なのか？

おれは必ず犯人を見つけ出し、復讐することを再度胸に誓った。

その為にもここを出なくては…

97

４月１８日　北海道　網走刑務所

１７：００

ガチャン

刑務所内で空腹に耐えていたおれの耳に大きな音が響いた。

ふと顔を上げると鍵が開いていた。

看守が来て開けたのか…

気配はなかったはず…

いや、空腹のため気付かなかったのか？

恐る恐る廊下に顔を出してみると、他の囚人達も同じように顔だけを出し、辺りを不思議そうに見回していた。

やはり、看守の姿は見当たらない。

一人の囚人が忍び足で抜け出すと、すぐさま引き返してきた。

「なんかわかんねぇけど、『ウッド・ベル』ってやつがここを解放したらしい！おれらは自由だ！自由だ！自由だー！」

それを聞いた囚人達は目の色を変えて、今まで暮らしてきた飾り気のない静寂に包まれた部屋を飛び出して行った。

おれも流れに身を任せ、自由になることを選んだ。

98

各々、自由という言葉を発しながらこの監獄の外を目指したが、それに呼応するかのように、刑務所内に、

ー復讐、復讐、復讐、復讐ー

という不気味な低い声が響き渡った。

頭の中を掻き回す音源が妙におれの鼓動を速めた。

囚人達と刑務所から逃げ出すために廊下を走っていると、ふと事務所のドアの隙間からテレビが目に入った。

他の囚人達はそんなことには目もくれず、外界を目指している。

おれは今何が起こっているのかを少しでも理解するため、また真っ赤に染まっている画面がなんなのかを確認するため、外に向かう囚人達の列に逆らい事務所へ入った。

「これは…」

99

『ホッカイドウノミナサン、オハヨウゴザイマス。

ムカシカラ、カイタクノチトシテ、タクサンノ、ヒトビトガ、イノチヲ、オトシテキマシタ。

ホッカイドウハ、ソノギセイノウエニ、ナリタッテ、イルノデス。

ソノレキシヲ、フマエタウエデ、ホッカイドウハ、ダレノモノカ。

…デハ…』

『 網　走　編 』

「網走編？そうか、あの渋谷、四国とテロ？を起こしたやつの仕業か」

おれは自分が刑務所に入れられる少し前から発生している、頭のおかしい事件の一つに巻き込まれたことを認識した。

「まあ、しょうがない。これを利用して真犯人を探せってことか」

おれは事務所の机の上に放置してある、充電中の携帯を充電器ごと引き抜き、服の中に突っ込んだ。

100

数日振りだったが、外に出て感じる世界はとても新鮮だった。

塀に囲まれていない自由な世界は心を豊かにするということが実感できた。

しかし、その気持ちは一瞬で崩れた。

道を進めど進めど悪の世界しか広がっていなかった。

普段は平和に過ごしていただろう外界は塀の中の住民により、破壊活動、略奪行為が行われていた。

「こいつら、出た途端にこれかよ…」

たしかにここを出てみたのはいいものの、何も持っていない。

何をするにも金が必要というのはわかる。

しかし、この有様はあまりにもひどかった。

「所詮犯罪者か…」

この醜い光景を前に立ち尽くしていると後ろから肩を叩かれた。

「きみはどうするつもりかな？」

びくっとして後ろを振り向くと、同じように囚人服を着た５０歳前くらいの男が立っていた。

101

「自分が生きるためにはどうするか？人間として生きるためにはどうするか？

きみは自分が生きるために行動してるのかな？人間として生きるために行動してるのかな？」

「は？」

「簡単に言おう。きみは目の前で起きていることを是と見るか否と見るか」

「いや、まあ、いいとは思いませんが…」

「よし、では一緒に行こう。ついて来なさい」

いきなり腕を引っ張られた。

「な、なにすんですか！」

男はおれの発した声にすぐに反応し、掴んだ腕の力を緩めた。

102

「あ、失礼。わたくし、ハマナカと申します」

「いや、そうじゃなくて、急に何をするんですかって意味ですよ」

「何をするか…ですか…逆に聞くが、きみは何をするつもりなのかな？」

「は？なんなんですかあなたは…」

「刑務所を抜け出し何をするのか？明確でないならここに残ったほうがいい」

なんだかよくわからなかったが、相手のペースに巻き込まれ、おれはおれの事情をこのハマナカという男に話した。

「そうか。きみもいろいろなことを抱えて生きているのだな。よし、わかった。協力しよう」

気が付くとハマナカという男と並んで歩き始めていた。

この男、不思議と吸い込まれていくような雰囲気を持っていた。

103

「おい！シノハラ！てめぇ！」

急に建物の影から、男が飛び出してきた。

男は頭と右腕から血を流し、囚人服はドス黒く染まっていた。

この男の殺気がおれら二人のどちらかに向けられていることは容易にわかった。

しかし、おれはシノハラではない。

「おい、兄ちゃん！騙されんなよ！」

これは確実におれに対して言っている。

「おれはこいつに嵌められたんだ。おれを囮にして、金を持ち逃げしやがって。おかげでこの様だ、くそ」

「ちっ、余計なとこに出てきやがって」

「えっ？」

完全にこのハマナカという男を信用してしまっていたせいで、理解するのに少し時間がかかった。

考えてみれば、刑務所に入っているということは、何か悪いことをしたということだ。

結局、ハマナカと名乗る男はこの血まみれの男に致命傷を与え、男はその場で死んだ。

おれは我に返った時点で全力で逃げたため、なんとか助かることができた。

104

冷静さを取り戻したおれは、この状況を甘く見ていたことに気付いた。

おれは無実でここに入れられていたが、ここは悪の巣窟である。

それが今全て解放されたとなると、この惨劇は必然ということだ。

現実を見て、現実を正しく認識する。

そして、誰も信じない。

これらを肝に命じておく必要がある。

おれにはおれの無実を証明するというやらなければならないことがある。

それをいかに実行するかを考えなければならない。

今手にしているのは、事務所から奪ってきた携帯だけ。

他には何も持っていない。

この状況から、なんとか新潟まで戻って、カオルに会わなくてはならない。

105

ブー

ブー

携帯が服の中で震えた。

『17：32　人喰い虫に対しての確実な対応策が判明。人喰い虫を食べた者は人喰い虫には襲われない。今すぐに人喰い虫を食べること』

4月に入り、『ウッド・ベル』というものが渋谷、四国を混乱させていることは知っていた。

携帯に緊急速報が入るようになったのも聞いていた。

しかし、自分が刑務所に入っていたこの短期間の間に、故郷である新潟を中心に全国で被害が出ていたのは知らなかった。

あの看守が虫にやられていたのはこのせいだったのか、というのがやっとわかった。

106

『９９，６５５，３８０／１３０，０００，０００』

この数字が日本国民を表していることは知っている。

一目見ただけでわかってはいたが分子の桁が変わっていた。

ブー

ブー

続けざまに緊急速報が流れた。

『１７：３５　ウッド・ベルの犯行声明は北海道、網走刑務所の解放と判明。無数の犯罪者が町を襲いつつ勢力を拡大している』

犯罪者という言葉の中に自分が含まれていると思うと、なんとしてでも自分の無実を証明しなければと思った。

網走からなんとかして新潟を目指す。

そのためにまずは札幌を目指すことにした。

同じ北海道という土地だが、距離はものすごく離れている。

「とりあえず移動手段が問題か…」

107

辺りを見回すと、すでに囚人達が車を奪い、暴走を始めていた。

手には、たった今収穫した包丁やナイフが光っている。

おれは囚人達の標的にされた家を覗いてみた。

ガラスは割れ、家具はひっくり返り、人が物のように投げ捨てられていた。

おれは何件か回り、必要な物を揃えた。

護身用の武器、食べ物、金、そして運のいいことに車のキーも見つけた。

車が手に入り、荷物を全て車へ乗せた。

準備はできたが、唯一、囚人服だけがなぜか脱げない構造となっており、そのままになってしまった。

108

４月１８日　北海道　国道

２２：１５

網走刑務所を解放されてから5時間が経った。

国道を走っているが、北海道という広大な地のせいか、網走での混乱が嘘のように落ち着いている。

道は一直線にどこまでも続いている。

明かりがなく暗くて周りはよく見えないが自然豊かな景色が広がっているのだろう。

刑務所から逃げた時より、幾分か気分は落ち着いている。

おれは今後のことを考えながら、たまに走っている前の車を１２０ｋｍくらいの速度で、対向車に気をつけながら抜いて行った。

ウーウー

少し離れた所でパトカーのサイレンの音がする。

バックミラーを見るとヘッドライトがチラチラと映っていた。

109

おれは１００ｋｍちょっとで走っていたがヘッドライトはぐんぐん迫ってくる。

ヘッドライトが近付いてくるにつれ、その後ろに赤いランプを煌々とさせながら走っている車が確認できた。

「やべ…」

おれはアクセルを踏み込み加速したが、一瞬の判断の遅れにより、後続車に追いつかれてしまった。

「貴様ら無駄な抵抗をやめて今すぐ止まれー！」

二台のパトカーからは、順次スピーカーでの説得がなされていた。

追われている車は三台。

今、おれの車も加わったため、計四台となる。

「バカヤロー！おれを巻き込むなよ！」

そう叫んだが、１８０ｋｍの猛スピードの中、カーチェイスが始まった。

110

ゾワッ

車が多少でもアップダウンのある所を通過すると身体が浮き上がる。

カーブに差し掛かれば、身体が外に持っていかれる程のGがかかる。

ハンドルを握る手には力が入り、どんな圧力にも耐えられるよう、身体を前のめりにし、前方とバックミラー、サイドミラーを順番に目だけで追う。

「あー、うぜぇ。こんな一本道が続いてたら脇道にも入れねぇじゃねぇか！」

ドゴンッドガッ！

後ろのやつが車をぶつけてきた。

おれが道を譲らないことにイライラしてきたのだろう。

しかし、おれはおれで警察に見つかれば捕まる身だ。

この今着ている囚人服を見れば誰が脱走犯かは一目瞭然だろう。

「ぶつかってくんなよ、バカヤロー！」

その度に鞭打ち症になりそうなくらいの衝撃が車を襲うが、おれはハンドルをさらに強く握りしめ、さらに強くアクセルを踏んだ。

111

前を走っている一般車両を見つけても、あっという間に追い越し車線から抜いて行く。

「逃げられると思ってるのか！
止まれー！」

パトカーの停止命令を無視し、後続車はおれの車の横に滑り込もうとする。

「させるかよ！」

おれはハンドルを切ってそれを阻止する。

バックミラーを見ると、後ろの車とパトカーもかなり激しくやりあっている。

「いい加減に止まれ！これ以上逃走するなら撃つぞ！いいから止まれ！」

囚人達の車は止まるどころか蛇行しパトカーを挑発する。

パンッ、パンッ

ギュルギュル

バックミラーの中のヘッドライトの動きから、車一台がコントロールを失ったのがわかった。

ズゴゴゴ、ドゴーッン

確実に脇の看板に突っ込み、大破したような音が聞こえた。

112

「まじかよ。ホントに撃ちやがった…」

そんな光景がミラー越しに見えていたが、サイドミラーから目を離した途端、一台が横につけてきた。

「くっ！」

おれがハンドルを切って幅寄せするのと同時に、向こうもハンドルを切ってきた。

ガガッ、ガギッ

ガガガガッ、ガガガッ

前に行かせないようにするおれと前に出ようとする囚人達の車が激しくぶつかり合い火花が散る。

おれの注意が左側にだけ集中した瞬間、もう一台の囚人達の車がおれの車の右横を駆け抜けた。

パンッ、パンッ、パンッ

二発目の音と共に、右のサイドミラーのガラスが割れた。

と同時に追い抜いて行った車が左右に小刻みに揺れた。

そして、道のアップダウンに合わせて一回弾んだと思った途端、車の裏が見えそのまま横転した。

「うわぁーーー！」

右前方で横転した車を避けようと思いきりブレーキを踏み、思いきり左にハンドルを切った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0983z/

日本国民参加型ゲーム

2012年1月10日08時48分発行